慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山田盛太郎著 日本農業生産力構造
Sub Title	
Author	常盤, 政治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.2 (1961. 2) ,p.153(77)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610201-0077
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610201-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

解決策は、どこに、どのようにあるのであろうか。
く経営年金制度そのものを考えさせられるところにして、この点の題を造出し、深刻化させている事実を知るわれわれにとっては、深め、一面において多くの弊害を生み出し、重大なる社会経済上の問め、配の強化を生み出すとの本書の指摘は、独占企業の発生、発達的支配の強化を生み出すとの本書の指摘は、独占企業の発生、発達

は、いま一歩踏み込みが欲しい。そして本書は、米国の年金制度のいるが、資本主義の問題意識、つまり経済学的な研究の点においてたい気がする。また本書の内容は、経営学的な点においていま少し求めについて、まず淡々と事実を記述せるところの書物にして、この点とれをようするに本書は、経営年金制度自体を、その長所と短所

を高く評価して止まないであろう。 を高く評価して止まないであろう。 を進めんとする場合、本書があまりに米国的なるために、そのままを進めんとする場合、本書があまりに米国的なるために、そのままを進めんとする場合、本書があまりに米国的なるために、そのままを高く評価して止まないであろう。

四八〇円) 主要参考文献九頁、索引八頁、昭和三十四年十二月、森山書店、主要参考文献九頁、索引八頁、昭和三十四年十二月、森山書店、《著者は大阪経済大学講師、序四頁、目次五頁、本文二五六頁、

(庭田範秋)

新刊紹介

『日本農業生産力構造』山田盛太郎著

括篇では、「序説」でまず、 あつかった補論とからなっている。第一部総 械化と価格形成を農業生産力との関係でとり 生産力地帯における農業生産力の構成と実態 を分析した第二部の実態把握、及び農業の機 出された、千町歩地主地々帯と改革前=高位 **産力の段階規定と地帯構造的規定に従って摘** 試みたものである」(まえがき)。「日本農業 つかった第一部と、そこで規定された農業生 生産力構造の構成と段階」を総括的にとりあ 性格を、生産力構造の深層から解明しようと いて解体し農業生産力水準を一段 と高めた 農地改革は地主的土地所有をその根幹にお 農業生産力の発展は零細農耕との矛盾を 本書は、日本農業のかかる「戦後段階の 農民層の分解を進行せしめてい

因を問題にしながら、 的土地所有の歴史的意義と限界が規定され、 **政革前高位生産力地帯の成立に示される地主** 後半では、 北=新潟の千町歩地主地々帯の成立と西南・ 分析がすすめられる。第三項の前半では、 民層分解の性格」という二つの指標を掲げて の段階」 では、「農業生産力構造の 地帯構成 と構造変化」、「農業生産力段階と改革後、農 され、第三項「農業生産力構造と『改革』後 な数字的資料の分析的整理によって明らかに 主的土地所有の生成・展開・転換過程が詳細 産力段階と地主的土地所有の構成」では、地 成が与えられる (一七頁)。 第二項 「農業生 「地主的土地所有下の基本的農業地帯」の 構 なわれるかによって東北型と近畿 型と 村の内部で行なわれるか、 生的段階の生産力構造の原型が、 が行なわれ、第一項では明治初年における原 段体系から示され、その上で、 存立する内面的矛盾は抑々如何ようなメカニ ズムをもつか」(五頁) という問題点の提示 上昇を記録している農業生産力構造の深部に 改革後における農民層分解の諸要 分解の分岐線へ富農規 外部との連関で行 資本蓄積が農 耕耘労働手 Ļ١ 東 Š

> 四二七頁・一一〇〇円〉 的農業地帯の生産力構造を組織的な実態調査 同研究の成果で、 著となっているが、 した 貴重な労作である。 と豊富な資料分析によって総括的に明らかに 破砕する必然が準備されつつあると ている。そして、改革後の農民層分解の進行定線を検出し、農民層の階層区分が試みられ が与えられている (一二〇頁)。 のなかに、日本農業が零細規模の制限の枠を 余名にのほる農業経済のエキスパー 現段階における日本の基本 同氏を主任研究者とする (岩波書店・A5 山田盛太郎 いう展望 トの共

-常盤政治

『講座・日本の労働問題

() 賃金]

本書は、舟橋尚道、藤本武両氏の編集のもとに、数氏によって執筆されたものである。とに、数氏によって執筆されたものである。とに、数氏によって執筆されたものである。

刊紹介

七七 (一五三)